



撮影：森 清

作家 真山 仁 さん

投資ファンドの社長・鷲津政彦が壮絶なM&Aを繰り広げる中で社会の問題をえぐりだす『ハゲタカ』シリーズ。原発の陰で見捨てられた地熱発電に光を当てて日本のエネルギー政策の問題を描いた『マグマ』。東日本大震災後の混乱期に出現したカリスマ政治家の裏にひそむ危うさを描いた『コラブティオ』。

様々な社会問題を描く作家・真山仁さんに、その背景をうかがいました。

(聞き手・構成：山内一浩, 町田弘香, 伊藤敬史)

— 『ハゲタカ』は、デビュー作だそうです。どの位お書きになりましたか。

取材に7～8カ月かけて、原稿の執筆は約2カ月でした。

— 早いですね。

最後は一日に70～80枚書いた日もありました。時間をとられたのは、苦手な金融の説明と、例えば山一証券が破綻した日のような歴史上の事実と小説の内容に齟齬がないように確認するところでした。

— 他にも、御苦労はありましたか。

金融を理解するのは大変でした。先端のディスカウントキャッシュフロー（DCF）法とか、金融工学の知識を登場人物に与えなきゃいけない。必死で勉強しました。

それから、当時はこの分野に知りあいがいなかっ

たので、ほとんど取材に応じてもらえなかったのも大変でした。結局、業界に詳しいキーマンに協力を得られるようになるまで、100人近くの人を取材しました。

— 『ハゲタカ』の出版のきっかけは、为什么呢。

『ハゲタカ』の前に1冊、共著で生保破綻をテーマにした小説『連鎖破綻（ダブルギアリング）』を刊行しています。ダイヤモンド社からこの本の依頼があった時、これが評価されたら1人で書かせてほしいと頼み、約束してもらいました。結果、それなりに評価されたので、書いていいことになりました。それが『ハゲタカ』です。ただ、金融小説しかだめと言われました。ちょうど経済小説がブームだった頃ですね。もともと自分の希望するジャンルではないので悩みましたが、小説家としてデビューできるせっかくの機会なので、お引き受けしました。

— 『ハゲタカ』を書き終えた感想は？

高校生の頃に小説家になると決めてから、二十数年間かかって、それがかなったのは、感無量でしたが、その一方、社会派作品を書きたかったので、遠いところから始まった大変さも感じました。賞を取ってデビューをしたわけでもなく、金融小説から抜けるのに何作かかるだろう、という思いがありました。

『ハゲタカ』は、当初は大して売れたわけではないので、その頃は生活苦でした。フリーのライターで結構稼いでいたのですが、小説執筆にかける時間が増えたため、自然減していきました。

— 『ハゲタカ』で、書きたかったことはなんですか。

経済小説の中には、実際に起きた出来事を小説仕立てにして説明していて、ある意味教科書的に読まれるものがあります。そうではなく、物語として面白く、一種の陰謀小説のようにしようと考えました。

物語を面白くするには、登場人物がいかにもいろいろなものを背負っているかがポイントですね。舞台はバブル崩壊後の日本ですから、そのまま描くと暗い話になってしまう。そこで、現代の歌舞伎のようなイメージで、強い個性のキャラクターを登場させました。

— 真山さんは、経済小説が有名ですが、人間についてお書きになりたいのですか。

小説って恋愛小説でもミステリーでも、人はなぜ生きて、なぜ死ぬかということを書いているんだと思います。だからそこが書けている小説は、どんなジャンルでも面白い。例えばミステリーですごいトリックがあっても、それだけの小説はもう1回読みたいと思わないですよ。でも、この人は何でこんな馬鹿なことをしたんだろうというような人間くさい小説だったら、もう1回読んでみたくになります。

— 登場人物に魅力があるともう1回読みたくなると

いうのはありますね。

そうですね。

— それで、『ハゲタカ』シリーズでお気に入りの人は誰ですか。

作者としては、登場人物に対しての思い入れは、あまり言わないことにしているのですが……。

— えーっ。

もちろん主人公の鷺津政彦は大事ですが、その次は飯島亮介でしょうか。彼がいなかったら、あの小説は成立しなかった。あの小説は、飯島が出てくるまでの原稿が、それなりにあったのですが、そこをバッサリ切っているんです。

— 書いて、捨てたんですか。

そうです。銀行が不良債権を目茶苦茶にした理由を伝えなくてはいけないと思っていたので、まずは銀行マンである芝野健夫が中心の物語を書きました。その結果、主人公の鷺津がなかなか登場できないし、平凡な銀行マンの小説になっている、と思いました。鷺津も悪い奴にするつもりだったので、その鷺津の悪さがかすむくらいの悪くて真っ黒な存在を作らないといけない。そう考えて生まれたのが飯島で、そこから小説が変わりました。

— 鷺津が元ジャズピアニストという設定の理由はなんですか。

鷺津は、ニューヨークに住んでいる時に、企業買収の世界に入ったのですが、日本人がニューヨークに住む理由はおおよそ2つです。1つは金融で、もう1つは芸能です。ジャズとかミュージカルとか。小説的に、ジャズピアニストを夢見た男というのは魅力的に思えました。

— このシリーズは、まだ続くんですね。

続きます。昨年秋にシリーズ4作目となる『グリ

真山 仁さんの著書



デビュー作 『ハゲタカ』

米系の投資ファンド社長鷺津政彦が、バブル崩壊後の日本に帰国。妨害や反発を受けながらも、瀕死の企業を次々買収していく。単行本は2004年12月ダイヤモンド社刊。現在は『新装版 ハゲタカ』として講談社文庫より発売中。



最新刊 『そして、星の輝く夜がくる』

舞台は東日本大震災被災地の小学校。阪神・淡路大震災で被災した応援教師小野寺徹平は、子どもたちに“頑張るな”と訴え、心を開かせていく。タブーを設けず現実に向き合った物語6編による連作短編集。2014年3月講談社刊。

ード』を発表しました。来年、5作目の連載を開始予定です。

— NHKでドラマ化されていますが、原作と映像化されたものとは、内容とかニュアンスがすごく違ってしまわないですか。

違いましたね。

— 原作者はそれについて、どう感じるものですか。

デビュー作が映像化されるのはとてもラッキーなことですから、NHKには、『ハゲタカ』というタイトルでドラマ化してくれるなら、何をやっても構わない。鷺津が女でもいい。ただ、自分達の足で立ち、この国を良くする為に、言い訳はやめようというこの小説のテーマは変えてほしくないと言いました。鷺津が元ピアニストじゃなくて元銀行マンになったり違った部分が多かったですが、結果的にとても上質なドラマでしたし、同じ匂いのする作品になったと思っています。

— 真山さんが新聞記者を2年半ぐらいでお辞めになったのは、どのようなご事情からでしょうか。

始めから小説家になるために新聞記者になったのですが、仕事は楽しかったです。上からそれなりに認められもしました。ただ、どうしても会社が出したい記事というのがあって、それに納得できないことが多くなりました。もう何年かいたら、その違和感が消えてしまうと思ったんです。このままでは会社内の優秀な記者で安住するだろう、まわりにもみ込まれるだろうと。その時に小説なんかいいやって思ったらおしまいだと考えて、新聞社を辞めました。

— お好きな作家は、いらっしゃいますか。

英米のミステリーが好きなので、P・D・ジェームズやジョン・ル・カレ、フレデリック・フォーサイス、ブライアン・フリーマントルなど。日本では横溝正史さん、山崎豊子さん、連城三紀彦さん。去年、山崎さんと連城さんは亡くなられましたが。特に山崎さんの『白い巨塔』は私が小説家を志したきっかけの1つでもあります。問題意識を持ったことを取材し、それを小説にする。さらにエンターテインメント性が高い。目標としている小説家の1人です。最近はそのようなタイプの小説家は少ないですが。



撮影：森 清

小説って、人はなぜ生きて、なぜ死ぬかということを書いているんだと思う。だからそこが書いている小説は、どんなジャンルでも面白い。もう1回読んでみたいくなります。

真山 仁

——確かにそうですね。

英米などでは、まず小説家はジャーナリストでありなさいと言われます。いずれにしても、小説のいいところは何でもありなところだと思うんです。面白ければいいでしょうと。そこで社会への問題意識を持つのか、時間を忘れるぐらい楽しんでスカッとするのか、生きていてよかったと思うのか、泣けるのか、なんでも構わないと思います。

——『マグマ』という地熱発電の小説も書いていらっしゃるんですが、これを書かれたのは2006年ですね。エネルギー問題は、今でこそ注目されていますが、その当時地熱について書かれた経緯は何ですか。

かねてから、日本はもっとエネルギー問題について考える必要があると強く感じていたからです。偶然、知人のお父さんが地熱発電にかかわっていて、話を聞きに行ったら、とても面白かった。エネルギー自給率は4%しかない、我々は電気を全部輸入に頼っている、でも足元に日本の原発の全てを止めても、発電できるだけのエネルギー資源があると聞いて、スクープを取ったときのような興奮をおぼえました。それが、うまくいかない原因は、当時の通産

省と環境庁の間にあった紙切れ一枚の覚書と温泉組合、利権食いがらみの沢山の政治家。小説には最高の素材です。なので、それでやろうと。地熱発電を日本中に広げたい思いもありました。

——脱原発の可能性は、どうお考えですか。

原子力発電については、これだけ化石燃料費がかさんで貿易収支が赤字になっている状況が続けているのは、日本は駄目になってしまう。しばらくは安全なもの、動かさざるを得ないと思います。大事なのは、絶対に動かさないという発電所を最初に決めることだと思っています。昭和40年代に作られたものは全部稼働しない方がいい。そうすると、全体の10%か15%ぐらいの発電は何かで代替しなきゃいけません。

火力発電は極力やめたい。温暖化の問題だけじゃなくて、コストの問題としても。そうすると、それに代わるだけの安定した発電が必要ですから、本当はもっと地熱発電で頑張らなきゃいけないんです。

会津磐梯山で地熱発電を開発していますけど、温泉組合が立ちはだかっていて、今、厳しい状況になっています。27万キロワットの地熱発電所ができれば

ば、福島にとってはいいことだと思うんですけどね。

— 真山さんは、『コラブティオ』という原発がらみの作品もお書きになっていますが、あの小説は連載の最後の方で3.11が起きたそうですね。

はい。2011年3月14日が最終回の締め切りでした。『コラブティオ』は、原発を国営化してパッケージにして輸出して、日本を再生させるというのがテーマのひとつです。自動車も頭打ち、家電は韓国にやられている。そこで、世界でトップレベルの技術を持つ原発のプラント輸出を国家プロジェクトとして立ち上げる。それを、いかに小説の中だとしても、甚大な原発事故の直後に描いてよいのかという状況になってしまいました。

原稿をどうするのか担当者から尋ねられて、最初は、この小説はボツだ、と思いました。ところが、翌日中国が、自分達の作る原発は世界で一番安全だと言いました。何ということをするんだと思いました。その後、原発大国であるフランスも、福島原発事故は津波が原因で、あれは地域リスクだと言いました。

それで、世界の原発は止まらないと確信したんです。だとすると、非難を承知で日本はそれでも原発を輸出するという小説を出してみることも、一種の問題提起になるのではないかと、決断しました。

予定通り2011年の7月に単行本を出すことになり、原稿用紙で500枚ぐらい差し換え、近未来の日本が舞台でしたので、色々な場면을震災が起きたことに書き直しました。これで、もしかして小説家として終わるかなと思いましたけど、幸いなことに評価をしていただきました。

— 今読むと完全に3.11以後の世界を描いた作品になっていますが、書き換えは如何でしたか。

大変でした。一から書いた方が楽でした。40日位しかなくて、ぼろぼろでした。原稿を直しているか、床で寝ているかのどっちかでした。

— 昨年12月の朝日新聞に特定秘密保護法について危惧する内容のコメントをされていましたが、取材をしていて秘密保護法案が成立したことの影響を感じたことはありますか。

今のところありません。影響が出るのは施行されてからでしょうね。

今、『週刊文春』で書いている『売国』という特捜検事が主人公のスパイ小説で、宇宙開発を扱っています。宇宙開発は特定秘密が多いんですけど、ちょうどこの前入稿した原稿の中で、文科省の人間が特定秘密保護法の1号案件で指名手配を打たれるという場面が出てきました。

もともとそういうストーリーにするつもりでした。特定秘密保護法はいずれ制定されるだろうから、どういう風に扱われるかを小説で書くのは面白いとか言っていたら、それから2カ月もたたない間に法案が通ってしまった。

あの法律が提案されたとき、一番疑問だったのは、スパイはどこにいるんだろうということです。人殺しがいるから、人を殺してはだめだという法律ができる。でも、スパイが逮捕されたという記事は見たことがないのに、何でスパイを防止する法律をつくるのかと思います。

私の小説の中で、彼は何で指名手配をされたのか、尋ねるんです。ところが、「それは特定秘密だから言えません」となるわけですよね。そんな恐ろしいことが起きる国は、もう法治国家ではないですよね。

プロフィール まやま・じん

1962年生まれ。大阪府出身。小説家。新聞記者、フリーライターを経て2004年に「ハゲタカ」（講談社文庫）でデビュー。著書に『マグマ』（角川文庫）、『プライド』（新潮文庫）、『コラブティオ』（文春文庫）、『黙示』（新潮社）、『グリード』（講談社）など多数。最新刊は、東日本大震災被災地の小学校を舞台にした、『そして、星の輝く夜がくる』（講談社、2014年3月刊）。著書を原作にしたドラマ（2007年「ハゲタカ」NHK、2012年「マグマ」WOWOW）や映画（2009年「ハゲタカ」）の制作もされている。